



.....  
 監督・脚本・製作＝メル・ギブソン／共同脚本＝ベネディクト・フィッツジェラルド／共同製作ブルース・デイヴィ、ステイヴン・マクヴィーティ／出演＝ジム・カヴィーゼル／モニカ・ベルッチ／マヤ・モルゲンステルン（日本ヘラルド映画配給／2004年アメリカ映画／127分）  
 .....

「パッション」とはイエス・キリストの「受難」のこと。捕らわれ、むち打たれ、十字架を背負い、ついに磔になるまでの「パッション」を生々しく描き、世界に大きな衝撃を与えた話題作。このキリストの受難を、今の時代を生きる私たち1人1人が自分のことのように感じるができるかどうか……？ 途中、思わず涙が溢れ出ることをおさえることができない、とにかくすごい映画……！

### 🎬 タイトルどおりのすごい映画！

『パッション』とは、イエス・キリストの受難のこと。原題は、『THE PASSION OF THE CHRIST』だから原題の方がよくわかるかも……。もっとも日本では、自分が磔にされる十字架を自ら背負わされて刑場まで歩いていくイエス・キリストの姿はよく知られているので、その絵があれば、『パッション』というタイトルだけで、十分に理解できるかも……。

それはともかく、この映画はユダの密告によって捕らわれ、「裁き」の結果、むち打ちの刑に処せられ、さらに十字架を自ら背負わされて刑場に向かい、ついに磔によって「死亡」という、キリストの12時間の受難の様を生々しく描いたもの。人類の苦しみをすべて1人で背負う「神の子」キリストの姿を、メル・ギブソン監督の解釈によって、本当にこれでもか、これでもかというほど描き出したすごいものだ。公開直後この映画を観て、ショックのあまり死亡した人がいるなど、全世界にセンセーショナルを巻き起こしたのも当然といえる、ホントに

すごい映画。むち打ちの刑のシーンや十字架を背負って歩くシーンのあまりのむごさに、多くの観客はショックを受けるはず。また、そんな中、キリストに駆けよる母マリアの姿や、1杯の水を飲ませようとする女性の姿のシーンに思わず涙がとまらない人もいるはず。そして、映画を観終わった後、1人1人がキリストの受難の意味を考えることになれば、この映画は大成功となるわけだ。

## 私とキリスト教

私が中学・高校時代を過ごした、松山にある愛光学園は、聖ドミニコ教会のバックアップで、1953年に設立された学校。そして男子だけの6年制一貫教育で、「愛と光の使徒たらんこと」を目指して建学された進学校。もちろん、キリスト教の押し付けはないものの、神父による倫理の授業があり、寮の名前も「聖トマス寮」「聖ドミニコ寮」というもの。また、絵画の時間では、よく宗教画などを描いていたものだ。私は宗教心の薄い日本人の中でも特にそれが薄く、親戚の仏事などもまじめに出席していないし、自分の葬式もどうでもいいと考えているタイプ。しかし、物語の興味や学問的興味は、仏教にもイスラム教にもそして当然キリスト教にもある。イスラム教に関する映画ですごいのは、『マルコム X』(92年)。2003年のイラク戦争開始以降のキリスト教 VS. イスラム教という宗教対立や、キリスト文化 VS. イスラム文化という文化対決の様相がなぜ生まれ、どのように展開していくのかは、世界的な大問題。

個人的には2001年の西安・敦煌旅行の際、イスラム寺院を訪れ、そこで礼拝している人たちを見て、はじめて私なりにイスラム教というものの現実的な姿が見えてきた感じがしている。私にとってキリスト教の教えは、好きなところと嫌いなところが両極端にある。好きなところは、契約の概念がはっきりしていること。また「本当に罪なきものだけが石を投げろ」という教え。他方嫌いなところは、旧約聖書に出てくるように神サマが生贄を要求すること。そして最も難しいところは、キリスト教の本質である愛、そして「汝の敵を愛せよ」というところ。

## キリストの映画と明治天皇の映画

中学・高校時代は、生徒だけの映画館通いは禁止だったが、学校推薦の映画が

あった。当時、学校推薦だった『十戒』(56年)、『キング・オブ・キングス』(61年)、『偉大な生涯の物語』(65年)などの「キリスト映画」を私はすべて観て、そこで描かれているキリストの一生は強く印象に残っている。

また、『ベン・ハー』(59年)の中で少しだけ描かれたキリストが行ったライ病を癒す奇跡や、キリストの処刑と引き換えに釈放された罪人バラバが後日、キリスト教に入っていく姿を感動的に描いた映画、『バラバ』(62年)でのキリストの姿も強く印象に残っている。

日本では、『明治天皇と日露戦争』(57年)や『日本海大海戦』(69年)などの映画で、明治天皇の顔をスクリーンで見せることは恐れ多くタブーとされていたのと同じように、昔はイエス・キリストの顔をそのままスクリーンで見せるのはダメだとされていたと記憶しているが、いつの頃からか、そういうタブーはなくなった、らしい……？ この『パッション』は、そんな考え方(遠慮)とは全く正反対にキリストの受難の姿を生々しく描き、それを観客に示すことによって、その受難の意味を、今、全世界の人々に考えてもらおうという意図の作品だ。

## 2人のマリア

キリストの母親はもちろん聖母マリア(マヤ・モルゲンステルン)。処女受胎の後、キリストが成人して大工の仕事に就き、布教活動を始め、33歳で処刑されるまで、ずっと愛し続けてきた。そんな母親マリアも、キリストが捕らわれ、処刑されることについては何もできない。ただ悲しみの目で見守るだけ。

そしてもう1人のマリアは、マグダラのマリア(モニカ・ベルッチ)。彼女はかつて姦淫の罪で捕らえられ、石打ちの刑にされているところをキリストに救われた女性。映画ではこのマグダラのマリアは、ずっと母マリアに付き添い、悲しみにくれながらキリストの処刑の様子を見守るだけ。この2人のマリアは、受難のキリストの回想シーンで登場するが、セリフはほとんどなく、悲しげにキリストを見守るシーンばかりだ。しかしそれだけでも、その姿は感動的で涙をそそる。

## 12人の使徒たち

キリストが「最後の晚餐」をともししたのは12人の弟子たち。その中で、もっ

とも有名なのは、裏切り者となったユダ（ルカ・リオネッロ）。ユダは銀貨30枚と引き換えにキリストを「売った」ものの、その罪の重さに耐えきれず自殺してしまうが、その様子もこの映画は実にリアルに描いている。また、キリストが糾弾されている時、キリストの予言どおり、「私はイエスを知らない」と3度言ったのが、ペトロ（フランチェスコ・デ・ビート）。もっともペトロは、その後、これを悔い改めてからは力強い宣教活動を展開したとのこと。

そして、キリストの逮捕をただちにマリアに伝えたのはヨハネ（フリスト・ジヴコヴ）。このヨハネは最後まで2人のマリアとともにキリストの受難を見届けることに……。その他「12使徒」と呼ばれるキリストの弟子たちはその後それぞれの人生を歩むが、それらの1つ1つが壮大な歴史的ストーリーとなっている。

## 4つの福音書

このキリストの受難の様子を旧約聖書と新約聖書によって記録したものがマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人による福音書だ。そこに書かれてある基本的な事実関係は、共通しているものの、その記述には多くの差異がある。それは、4人の体験したことの違いや、見解の相違があるのだから当然のこと。大切なことは、彼らが身をもって体験したことをそれぞれの経験や感性にもとづいて記録したものが、これらの本だということ。したがって、そこに書かれてあるキリストの生誕やキリストが行ったとされる数多くの奇跡、そしてこの映画が描く受難やキリストの復活などは決してインチキ話ではなく、真実の物語だということ。もちろんそれを信じるか信じないか、またその教えをどこまで納得するかどうかは人それぞれでいいのだが、私としては、このキリストの受難の物語は歴史的事実だったと考えている。

## 映画の理解に不可欠の時代背景

キリストが生まれ、布教活動をしていた時代のパレスチナ、ユダヤはローマ帝国の支配下にあった。ちなみにシーザーが死んだのは、「シーザーが死んだ」と覚えさせられた紀元前44年。そして、ローマ帝国からパレスチナに派遣されていた当時の5代目の行政長官はピラト（ホリスト・ナーモヴ・ショポヴ）。また、

キリストが生まれたナザレの地はガリラヤにあるが、そのガリラヤの王は当時、ヘロデ（ルカ・デ・ドミニチ）。また、ユダヤの最高権力者は、大祭司のカイアフア（マッティア・スブラージャ）。彼は、最高法院の議長や議会の議長も兼ねた、政治と宗教の最高権力者だった。このようないわば、守旧派＝抵抗勢力であるユダヤの司教たちが、メシア（救世主）とかユダヤ人の王とかと呼ばれていたキリストを危険人物だと認識したことはやむをえないものだった。そのために、ユダヤの司教たちは、あくまでキリストを死罪にすることをローマ帝国の行政長官に「要求」したわけだ。行政長官のピラトは、キリストを死罪にする必要などは認めなかったものの、ユダヤ人司教たちの要求を無視すれば暴動が起こるかもしれないことを危惧し、結局はその声に押し切られてしまったというのが真相だ。キリストが十字架による磔の刑に至るのは、このような当時の政治的・宗教的背景と力関係によるものだというを理解しておく必要がある。

## その他、多くの学ぶべきこと

私は、キリスト教信者ではないから、私が持っているキリストについての知識はごく一部だけだが、この映画を深く理解するためには、多くの勉強が必要だ。

パンフレットには、『『パッション』をよりよく理解するためのQ&A』というページがあり、10項目ほどがQ&A方式で要領よく解説されている。また、「プロダクション・ノート1、2」も参考になるので、この映画については、パンフレットの購入が不可欠。さらに作家の加賀乙彦氏による「肉体をもつ人間として極限の苦痛を背負ったイエス・キリスト」の解説がある。加賀氏は1929年生まれだが、1987年、58歳の時にカトリックの洗礼を受けたとのこと。自らのキリスト教との接点を背景として、このパンフレットに書かれている文章は、短いものだが実に説得力がある。今さら、一から旧約聖書や新約聖書を読み始めることは到底できないだろうが、この映画鑑賞を契機として、もう1度キリスト教の勉強を試してみれば、キナ臭い時代の今、新たな自分が発見できるかも……？

2004(平成16)年5月6日記